奈良県橿原市　国の登録有形文化財

浄楽寺　総合調査報告書　浄楽寺説明会の記録

－仏像・仏画－

2024 年 10 月 26 日　場所：浄楽寺本堂

仏像調査の方法

奈良に来て 40 年、もとは奈良県の文化財保存課で、その後奈良の国立博物館で定年を迎えました。定年退職後 14 年経ちます。

今回仏像の調査ということで仏様を厨子からお出しして、白いスタジオ膜を張って撮影をして、寸法を計りしました。奈良大学准教授の大河内智之先生と学生 2 人の 4 人のチームで調べました（4 頁）。

普段、ご本尊は遠くから見上げるものですが、今回は美術品として調査しました。とても優しい顔をしておられる阿弥陀如来です。

寺院明細取調帳

今回仏像と合わせて寺院目録、財産目録も調査しました（19 頁）。

こうしたお寺の寺院明細が作られたのは、明治中頃、明治政府に提出を求められことがきっかけで、いわゆる神仏分離がなされているかのチェックが目的です。ちなみにこの段階では、お寺の財産としての田畑類はすでになくなっています。

明治 24 年の「寺院明細取調帳」には、住職と檀家惣代として北村さん、吉川さん、大西さんです。明細目録ではお寺のいわれや本堂再建のことが書かれ、仏像のことも本尊阿弥陀如来立像、宝暦六年（1756）と年号が記されています（20 頁）。

絵画関係では、聖徳皇太子繪像の年号は文化九年（1812）です。

明治 24 年の明細取調帳では什器も調べています。今ですと文化財技師が目録を作るのですが昔はどうやって作ったのでしょうか？

大正五年の明細帳（22 頁）は、きちっとしていて、世代住職の経歴などが書かれています。

浄楽寺は良い調査対象

今回の文書調査の中で二つの重要な文書がありました（21 頁）。最初下見に来たときにこれを見て、この寺は歴史がわかって良い調査対象だと思いました。この寺がいつできたかの記録があるからです。

宝暦六年に本山から寺号をもらっています（史料 18）。本尊が宝暦六年に浄楽寺に納められた（寄進された）との記録です。細かくみるとそこには皆さんご存知の浄照寺と専念寺が出てきます。

36 頁には絵画の写真を大きく載せてもらいました。内陣の奥の壁にあったものですが、この写真でよくわかります。軸を外陣まで出して撮影したときに、表具の裏側を見ると墨書の裏紙を貼り付けたものがありました。

この仏像は、この建物よりもっと前にあったことがわかります。明治の廃仏希釈の後、妙楽寺からこの建物を引き継いだ時には掛物も仏像もすでにあったということです。それを再建した本堂に飾っているのです。

本尊（仏像）について

真宗のご本尊は「南無阿弥陀仏」の阿弥陀如来で、それ以外はありません。浄土真宗はそれぐらい厳しい宗派です。真宗は阿弥陀さんにすがる他力本願ですので、仏像は極楽浄土から現れて迎えに来るお姿をしています。印相は親指と人差し指を合わせて迎えに来ることを表わしています。「来迎」という形です。阿弥陀さんの印相のほかのひとつは瞑想する印相です。極楽浄土で静かに瞑想されていることを表わします。

こちらの仏様は全身光り輝いています。阿弥陀様も薬師様も心の煩悩を明るく照らすということで輝いています。明るくすると落ち着く、明るくすると問題がわかるし、煩悩も照らし出すということです。

明るく輝いている姿を背中で表したものが放射状の「放射光」で、それは48本と決まっています。特に浄土真宗では「48の願いを叶えてくれる」ということで、その象徴という意味もあります（本仏像では1本欠けています）。

仏様は蓮の花にお立ちになっていますが、これはインドが始まりです。蓮は清らかになるもので、その上に仏様はおられます。人が亡くなったあと極楽世界には、阿弥陀さんが連れて行ってくれます。そして蓮の花から赤ん坊の形で生まれます。さらに女性は男に変わって極楽の世界に行きます、男尊女卑の世界（女人往生）です。

仏像が立つ台（蓮華座）には段数の決まりがあり、浄土真宗の東と西で違い、九重座にするのがお西さんの決まりです。後背も同様に違っていて、後背の光っている48本の光明を支える柱がここの場合は二本足の雲形（雲唐草）です。イメージとしては、仏様は空【くう】に浮いている、雲に乗っている、そして光り輝いている雲に乗るという、すなわち、お西さんの考え方です。

東系のお寺は放射光を支えるのは一本足で、デザインが全く違います。それだけ見ると、ここは東さんですね、と分かるようになり、このような会話で調査先のお寺さんとはいい関係をつくれます。

仏像に書かれた文字

調査では、仏像は横からも背中がからも撮影します。いろんな形を読み込み、形状を調べます。この像を調べると足の裏に赤い文字があり、背中にも字がありました。

文字から田原本の浄照寺、土橋の専念寺、その二つの寺が本山との間を取り次いでいることがわかります。中村でお寺を建てようとすると二つの取次ぎ寺院によって本山と接触します。末寺から直接本山、はだめで仲介者が必要になるのです。

浄楽寺の仏様は底や後ろまで金箔が貼られています。見えないところまで金を貼っているということです。これは純金の発想で、本当は金で作りたかったものを木で作って金を貼っているのです。普通は、見えないところには金箔を貼らないのですが、こちらの仏像ではここまで丁寧にやっています。底に赤い文字で「和州　中村　惣道場」とあります。

さらに底には下駄の刃のようにホゾが二つあります。その側面に印鑑と本尊製作者「渡辺康雲」の署名があります。渡辺康雲は西本願寺の専属の仏師で、西本願寺門の東側で、京都の古絵図に載っている工房の仏師です。像底にはどこの仏像か分かるように、こちらの住所も書いています。

仏像を動かすときに、りんご箱のような木箱に納められてクッションを入れて移動したと思われ、真宗寺院によってはその木箱まで残っているところがありますが、奈良ではまだ見たことはありません。

背中の墨書は御門主さんが検分して合格した時にサインをします。門主さんの直筆かどうかは検証する必要があります。

たくさんの仏像に対して、通常は御門主の花押【かおう】を書くのですが、ここでは誰かが代筆したか、もしくは書記官が書いたかもしれません。このように、この仏像は本山からこちらに来る時までの経過がわかる仏像といえます。

仏像の値段

末寺で仏像を備えたい時には本山の許可を得て、向こうで仏像を作ってもらうわけですが、何かと経費がかかるわけです。仏師渡辺康雲にお金を納める、本山の事務局にお金を納める、当然そういった御礼銀の捻出はここの惣道場、つまり皆さんのご先祖がなさったことだったでしょう。さていくらかかったのでしょうか？

実は、仏像の大きさによって額が決まるのです。

「御尺　壱尺三寸」は「銀195匁」とあります（41頁）。

こちらの仏様は、総高は頭から足先までで111cm、像高60.8cm、髪際の高さが55.8cmです。

この場合大きさに過敏になるのは、お値段が違ってくるからです。こちらの仏様は一尺八寸ですので、270匁となり

ます。銀の 270 匁というのは、現在の価値でいったいどれぐらいの額かは、この像がいつできたかによってわかります。

仏像の年代

この仏像の銘文からはいつ作られたかがわかりません。が、21 頁で木仏尊像が宝暦六年に寄進されたとあります。この文書がこの仏像がいつできたかの示唆になると考えます。文書の年号（宝暦六年）と仏像の作られた年代が一致するか？仏像の様式としては大丈夫か（妥当か）考えました。

一般的に真宗寺院の仏像は皆どれを見ても同じ姿です。渡辺康雲もたくさんの仏像を作っているので、時代による変化はよくわかりません。しかも渡辺康雲は襲名して三代いるので、何代目の渡辺康雲がどんな癖があるかがわかればいいですが、まだ研究が不足しています。

こちらの仏像の体型は、頭部が小さいのに比べ両肩と両肘の左右への広がりが大きく作られています。こういうお像は、直感的に、江戸の早いころのものではありません。江戸の早いころは引き締まった体で、それが少し大柄になって江戸中期以降かなという目見当です。

仏像彫刻というのは衣の皺を彫ります。絵画では皺【しわ】をさっと書いて最後まで書かなくてもいいのですが、彫刻は最後まで皺をつけないで途中でやめると、荒削り、未完成とみなされます。辻褄が合うように皺を彫るのが宿命なのです。

こちらの仏像をよく見ますと、辻褄の合わない皺がありました。「写し崩れ」といい、それがあるので、そんなに古く年代を設定できないわけです。渡辺康雲の工房ではたくさんの仏像を作っているだろうから、こういうミスが起きたのだろうと思われます。

よって、17 世紀ではなくて 18 世紀、江戸中期の仏像ではなかろうかと考えます。江戸後半も幕末 19 世の黒船来航以降になると、ご本尊は調査の経験上もっと華奢になります。18 世紀、江戸中期かなと判断したところ、示し合わせしたわけでないですが、大河内先生も江戸中期かなと呟いたのでした。

まとめると宝暦六年の像に該当するという結論です。お寺が浄楽寺という寺号をもらった時の仏像だろうと思います。

寺号をもらうとは

寺号をもらうということはどういうことでしょうか。

真宗寺院では、当初テレビも娯楽もない時代に野良仕事の後、夜に念仏を唱えに集まることで始まります。こうした集会所を道場と呼びました。道場の時にはまだ仏像がありません。六字名号や南無阿弥陀仏という軸をかけて拝みます。その後絵像（絵画の阿弥陀像）に変わります。さらに発展すると木仏（木造の仏様）に変わっていきます。文字から絵画、そして彫刻へ、惣道場から寺へと進みます。

本山-末寺は、室町時代からのゆるい関係から、江戸時代には宗門改め（キリシタンでない証明）により、お寺に帰属する必要があったので、そうした本山-末寺制度を徳川幕府も利用し、さらに本山-末寺の関係を強くします。真宗寺院では江戸の始まりぐらいから、惣道場が寺に変わっていきます。

ここの場合には惣道場から寺に変わったのが江戸中期で、それを仲介したのが浄照寺と専念寺であったことがわかります。住職から伺うと今も浄照寺には十数ヶ寺が集まるそうです。土橋の専念寺は明治時代に興正寺派になり西から分離したため、浄楽寺は今は浄照寺さんと繋がっているようです。

仏画について

絵画は二度にわたって揃えられています。最初に聖徳太子像と七高僧像、20 年後に親鸞聖人像と本如像が揃えられます。それで末寺として完成します。檀家さんはそのためにその都度に支納しないといけなかったことでしょう。

その後、妙楽寺から輪蔵をもらい受けるということになったようです。

（奈良国立博物館名誉館員　鈴木喜博）